

詩篇 122 篇

都上りの歌。ダビデによる

《神殿にいる喜び》

- 1 人々が私に、「さあ、主の家に行こう」と言ったとき、私は喜んだ。
- 2 エルサレムよ。私たちの足は、おまえの門のうちに立っている。
- 3 エルサレム、それは、よくまとめられた町として建てられている。
- 4 そこに、多くの部族、主の部族が、上って来る。イスラエルのあかしとして、主の御名に感謝するために。
- 5 そこには、さばきの座、ダビデの家の王座があったからだ。

《エルサレムの平和を求める祈り》

- 6 エルサレムの平和のために祈れ。「おまえを愛する人々が栄えるように。
- 7 おまえの城壁のうちには、平和があるように。おまえの宮殿のうちには、繁栄があるように。」
- 8 私の兄弟、私の友人のために、さあ、私は言おう。「おまえのうちに平和があるように。」
- 9 私たちの神、主の家のために、私は、おまえの繁栄を求めよう。

120 篇：カナンの地の外に住む者の歌

121 篇：巡礼の旅の歌

122 篇：エルサレム神殿到着の歌

123-133 篇：祭で歌われる祈り

134 篇：帰路に着く者への祝福の祈り

離散のイスラエル人が巡礼のために世界各地からエルサレム目指して出発し、荒涼とした道りを経て都に到着しました。その晩はまだ神殿の外で待機し、朝を待っていたのでしょう。そこに誰かの大きな声が響きました。「さあ、主の家に行こう」（1節）と。エルサレム神殿の門が開かれ、巡礼者は一斉に入って行きました。本篇はそのような情景を思い浮かべながら読むとよいでしょう。詩人は喜びに溢れ、神殿の中に立っていることを実感していました。「エルサレムよ。私たちの足は、おまえの門のうちに立っている」（2節）。自分は今まさにこの場所にいるのだ。夢見た土地を初めて訪問したとき、同じような心境になったことがあるでしょう。エルサレムについて「よくまとめられた町」（3節）という言い方がされています。砂漠や山地を歩いて来た人々にとって、秩序正しく建てられたエルサレムの建造物は燦然と輝いて見えたのではないのでしょうか。そういえば、主イエスの弟子たちもこんなことを呟いています。

イエスが、宮から出て行かれるとき、弟子のひとりがイエスに言った。「先生。これはまあ、何とみごとな石でしょう。何とすばらしい建物でしょう。」（マルコ 13:1）

それに対して主は、荘厳な神殿も跡形もなく崩される日が来ると予告されました。建物そのものが重要なのではなく、神の臨在がそこにあることこそ重要であると。そして、その神の臨在そのものとして自

